

## 箴言29章25節 「人への恐れ」

### 1A 人への恐れ

1B 正しい事の犠牲

2B 神よりも人を気にする過ち

1C 民に圧されるアロン

2C 民を恐れるサウル

3C 女中を恐れたペテロ

3B 信仰や証しへの妨げ

4B 人を恐れた神の人

1C アブラハムの偽り

2C エリヤの逃亡

### 2A 主への信頼

1B 敵からの救い

2B 正しいことを行なう力

2B 守られる保証

## 本文

私たちの聖書通読の学びは、ついに箴言の終わりまで来ています。午後に、28章から31章までをお読みしますが、今朝は29章25節に注目したいと思います。「人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。」

私たちは、先週の木曜日、成増バイブルスタディでローマ人への手紙4章を読みました。アブラハムが神を信頼して、それゆえその信仰が義と認められたことを学びました。その後で互いに分かち合うことができ、とても恵まれました。神を信頼すること、それによって神が義と認めてくださり、ゆえに他に心配することは何もないことが分かります。神の恵みを始めとして、力や癒し、あらゆる良き物が流れ出てくる源泉です。それゆえ、神の国が信仰の義人から広がり、周囲の人々も神の支配と恩恵の中に憩うことができます。

しかし、その麗しい御霊の働きを妨げてしまう、強い力が存在します。その一つを今朝学ぶところ「人を恐れる」ことです。人が自分のことをどう思っているのか気になります。その人々が思っていることに自分を合わせて生きようとするという圧力を自ら受けていきます。また、自分にとって、これは行うべき正しいことだと分かっている、周りの人々がどう思うか分からないとして、それを行わないということがあります。そして、そのことによって神ではないもので影響を受けるようになり、神ではなく人が中心となってしまいます。ここにあるように「罫」に陥ります。

## 1A 人への恐れ

しかし、人への恐れほど、私たちに身近なものはありません。私が信仰をもって間もない時に、ある伝道師の人に祈ってもらったことがあります。その時に、この御言葉がその人に与えられたのです。人を恐れる、あるいは人の目が気になることは私にとってあまりにも身近なことです。いつも心の中で戦っています。

## 1B 正しい事の犠牲

人を恐れたので正しいことができなかつた人として、総督ピラトのことを思います。彼は、イエスを尋問したところ、何一つ罪に値することはしていないことを知っていました。しかし、このまま釈放したら、ユダヤ人たちがどのように騒動を起こすか知れませんでした。それで、彼はイエス様を懲らしめにかけることに決めたのです。この時点で既に妥協していますが、彼はそれで彼らを宥めると思っていました。そして、凶悪犯であるバラバを出してきて、彼を釈放させることはないだろうと思っていました。ところが、彼らはバラバを釈放することを選びました。そして、「十字架につけろ」という怒号が飛び交います。そして、ヨハネはこのように書き記しています。「ヨハネ 19:16 祭司長たちは答えた。「カイザルのほかに、私たちに王はありません。」そこでピラトは、そのとき、イエスを、十字架につけるため彼らに引き渡した。」カイザルに自分のことが報告されることを恐れたのです。それで、してはいけないこと、無罪のイエス様を十字架刑にするという罪を犯しました。

## 2B 神よりも人を気にする過ち

私たちが人を恐れている時に、人の目を気にして自分を守ろうとしている時に、何が忘れられているかという、箴言で最も強調されている「主への恐れ」です。人のことはものすごく気にするの、なぜか神のことは気にしていません。

そこでイエス様は、人の目を気にして宗教活動しているパリサイ人たち偽善である、気をつけなさいと弟子たちに注意されました。そして、こう言われたのです。「ルカ 12:4-5 そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」神を恐れている時、人を恐れることがなくなります。そして人を恐れている時、神を恐れていません、それで罪を犯します。

## 1C 民に圧されるアロン

人を恐れたことで思い出す人は、アロンです。モーセが、主に会い、主から聞くためにシナイ山に上りました。そして四十日間、主から幕屋に造り方について聞いていました。その間、民は山のふもとで宿営していました。モーセがなかなか降りてこないの、民はアロンのもとに詰め寄り、金の子牛を造るように要求しました。モーセによって与えられていた神の臨在が希薄になったので、これまで自分が親しんでいた古いもの、過去のものに愛着と安心を求めたのです。それでアロンが金の子牛を造りました。それで民はそれを拝み、また性的にも戯れました。モーセがそのことを主

によって教えられました。それで、モーセは神の指によって書かれていた石の板を山の麓で砕いてしまいました。イスラエルの民が早速、主が命じておられた戒め、他の神々があなたにあってはならない、ということと、偶像を造ってはならないということ、姦淫を犯してはならないことを破っていました。

それでモーセがアロンに、「出エジプト 32:21 この民はあなたに何をしたのですか。あなたが彼らにこんな大きな罪を犯させたのは。」と問い詰めました。するとアロンが答えました。「出エジプト 32:22-24 わが主よ。どうか怒りを燃やさないでください。あなた自身、民の悪いのを知っているでしょう。彼らは私に言いました。『私たちに先立って行く神を、造ってくれ。私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。』それで、私は彼らに、『だれでも、金を持っている者は私のために、それを取りはずせ。』と言いました。彼らはそれを私に渡したので、私がこれを火に投げ入れたところ、この子牛が出て来たのです。」アロンは、自分に詰め寄ってきた民を恐れたのです。その要求に圧されて、なすがままにさせたのです。そしてアロンは、「金を火に投げ入れたら、子牛ができた。」と自ら欺いて、うそぶいてしまいました。人への恐れが、このように罪を神に対して犯す罠となります。

## 2C 民を恐れるサウル

民を恐れていた王が聖書に出てきます。サウルです。民のしていることを気にして、それで主から命じられていることを破っていく過ちを彼は犯しました。イスラエルがペリシテ人と戦いました。兵力はこちらが二千人、相手は戦車三万、騎兵六千という圧倒的な違いでした。それでイスラエルの民は震えながらサウルについていました。ギルガルで預言者サムエルが七日後に来る予定になっていましたが、まだ来ませんでした。そのうち、民が彼から離れて散って行こうとしました。それが気になり、サウルはしてはいけないことをしました。「全焼のいけにえと和解のいけにえを私のところに持ってきなさい。(1サムエル 13:9)」いけにえを捧げるのは、祭司だけがすることです。王であるサウルは、関わってはならないことです。

つまり、良かれと思ってやったことであっても、それが主の御心を著しく損なったのです。サムエルは、「あなたは、なんということをしたのか。」と問い質します。サウルはこう言います。「1サムエル 13:11 民が私から離れ去って行こうとし、また、あなたも定められた日にお見えにならず、ペリシテ人がミクマスに集まったのを見たからです。」サウルは良かれと思ってやったと弁解していますが、自分を偽っています。彼の動機は、民への恐れでした。自分から民が離れてしまう、だから彼らを自分に引きつけて置かなければいけないという不安と恐れから、このことを行なったのです。

そしてサウルは、同じ過ちを再び犯し、王位から退けられます。アマレク人との戦いの時、主は「アマレク人を打ち、そのすべてのものを聖絶せよ。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ。(1サムエル 15:3)」と命じられました。サウルは戦いました。けれども彼は王アガグを生け捕りにしました。それから、肥えた羊や牛の最も良いものを惜しんで、値打ちのないものだけ聖絶しました。彼は、大体それを行っていたのだから構わないと思ってい

たのでしょう。しかし、それこそが神に対する大きな罪でした。一部だけ、表面的に行ったからといって、それで相手を喜ばすことができるでしょうか？いいえ、むしろ自分のしたいことはやるだけやって、それで相手も尊重しているように見せかけているわけで、心を非常に痛めるわけです。同じように、神に命じられたことは、一部行なっていればよいものではありません。

それで、サムエルがサウルのところに行くと、「主の祝福がありますように。私は主のことばを守りました。」と言いました。サムエルはその時、老齢で目が見えなくなっていたのかもしれませんが。彼は、「では、私の耳にはいるあの羊の声、私に聞こえる牛の声は、いったい何ですか。」と尋ねました。サウルは、いろいろな弁解をしました、主の御声に聞き従ったと言い張りしましたが、サムエルが、「15:22 主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」と話し、王位が退けられたことを宣言しました。

するとサウルの発言は、ころっと変わります。「15:24 私は罪を犯しました。私は主の命令と、あなたのことばにそむいたからです。私は民を恐れて、彼らの声に従ったのです。」民を恐れていたのです！アマレク人を全て聖絶したら、イスラエルに栄誉が行かないではないか？アガグを生け捕りにしないと、戦ったことを誇れないではないか。そして、いけにえだってこんな良いものまで聖絶してしまつては、民から不満が出てくる、理解してもらえないに違いない。民の目、そして自分の面目のために、これらのことを行なっていたのです。

### 3C 女中を恐れたペテロ

サウルは結局、悔い改めることができず死んでしまいました。新約聖書では後に悔い改めた、教会の指導者がいます。ペテロです。イエス様が、「鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」と言われたら、「たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。(マタイ 26:35)」と言いました。これは気持ちの中ではそうだったのだと思います。けれども、イエス様はゲッセマネの園で、「心は燃えていても、肉体は弱いのです。(41 節)」と言われました。確かに、彼の肉はとても弱かったのです。

イエス様が捕えられて、大祭司カヤパの家で裁判を受けられましたが、ペテロは中庭まで入っていき、火にあたっていました。すると、女中の一人が「あなたも、ガリラヤ人イエスといっしょにいましたね。」と言いました。こんな、若い、少女のような女性の言葉に恐れをなして、彼は、「何を言っているのか。私にはわからない。」と言ったのです。もう一回、他の女中が尋ねて、彼は、「そんな人は知らない。」と言っています。そしてもう一度尋ねられて、彼は知らないと言って誓いました。ペテロは、人を恐れたのでイエス様を知らないという、イエス様を拒む大きな罪を犯しました。

### 3B 信仰や証しへの妨げ

人への恐れは、数多くの人々が信仰に至るのを妨げる大きな原因となっています。「わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。(ヘブル 10:38)」と主

は預言者ハバククに言われました。主のところに来て、この方を信じることに、人を恐れることは相容れません。私が、イエスが主であると告白することで、自分の周りの人々はどう思うのか？家族は？親戚は？職場で、自分がクリスチャンであることを告げたら、馬鹿にされるかもしれない。それに、仲間といっしょにやっていた楽しいこともできなくなってしまうかもしれない。そうした恐れがあるので、イエスが救い主で、自分の罪のために死に、三日目に甦られたことを知っていても、一歩、その決断と行動に移せないでいます。

そして、信仰を持った後で、人々にイエス様のことを話さないのも、人への恐れが大きな原因の一つです。「ルカ 12:8-9 だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子もまた、その人を神の御使いたちの前で認めます。しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。」主を信じている者は、人の前でもそのことを証言します。そして、証言する時には、聖霊が語るべき言葉を与えてくださいます。

#### 4B 人を恐れた神の人

##### 1C アブラハムの偽り

人への恐れという問題は、信仰を持つようとしている人、信仰を持ったばかりの人たちだけの問題ではありません。信仰歴が長くとも、どんなに主に用いられている器でも犯してしまう過ちであります。私たちが先週、成増の聖書の学びで読んでいったアブラハムは、すべて信じる者の父と呼ばれるほど、信仰の人でありました。自分の知らない土地に、ただ主に語られたということだけで動きました。自分は 99 歳、サラは 89 歳という老齢なのにイサクが生まれることを信じました。そしてイサクを捧げなさいと命じられた時に、臆することなく従おうとしました。ところが、その彼も人を恐れて、大きな過ちを犯しました。

アブラハムがゲラルにいる時に、彼は妻サラに、「アブラハムの妹です」と言うようにさせました。それでゲラルの王アビメレクがサラを自分の妻の一人として娶りました。ところが主が彼に語られ、「あなたは死ななければならない。あの女は夫のある身である。」と言われました。アビメレクは、まだ彼女に近づいていなかったのも、また妹だと聞いていたからめとったことを神に訴えました。アビメレクはアブラハムに、「あなたはどういうつもりで、こんなことをしたのか。」と問い詰めました。アブラハムは答えました。「創世 20:11 この地方には、神を恐れることが全くないので、人々が私の妻のゆえに、私を殺すと思ったからです。」人を恐れていたから、このような偽りを言いました。

##### 2C エリヤの逃亡

もう一人、信仰の人と言えば預言者エリヤがいます。彼は、一人で 450 人のバアルの預言者と対決しました。祭壇を作り、その上にいけにえを載せ、自分の神の名を呼び求め、天から火が降ってくるのが、本物の神だということにしました。バアルの預言者は気が狂ったようにバアルの名を呼び求めましたが、一日中、何の反応もありませんでした。エリヤはその間、彼らをあざ笑って、「あなたがたの神は、どこか旅行に行ってしまったようだね。」とまで言いました。そして、エリヤはイスラエルの民を改めて呼び寄せて、祭壇を築きました。その周りに溝を作り、そしていけにえの

上にたっぷり水をかけさせて、溝にも水が満ちるほどにかけさせました。

そしてエリヤは祈りました。「この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになしてください。(1列王 18:37)」それで、天から主の火が降ってきて、全焼のいけにえだけでなく、なんと溝の水までも舐めつくす勢いでした。それでバアルの預言者を処刑するように、イスラエルの民に命じました。アハブは自分の宮殿に戻り、イザベルに起こったことを伝えました。イザベルがエリヤに伝えました。「19:2 もしも私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようになかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」エリヤは恐れたのです。

それで彼は長い旅に出かけました。はるばる、シナイ山まで来ました。そこでかつて、主がモーセに律法を与えられたからです。そこで風や地震、火もありましたが、そこに主はおられません。その後で、かすかな細い声がありました。そして主が、「エリヤよ。ここで何をしているのか。」と尋ねました。そして、自分がいかに熱心に主に仕えてきたか、けれども自分が殺される身になっているかを話しました。主は、まるでその声を無視するからのように、次の使命を与えられました。「ダマスコについて、ハザエルに油を注ぎ、アラムの王とせよ。エフーに油を注いで、イスラエルの王とせよ。そしてエリシャにも油を注いで、あなたの代わりに預言者とせよ。」エリヤは、人を恐れたので、その間、主に命じられていることを怠っていたのです。

## 2A 主への信頼

ですから、人を恐れると罠にかかります。けれども、それに対する治癒はもちろん、主に信頼することです。主ご自身を知り、その恵みを知ります。主が、キリストの成し遂げられたことによって、私たちが義とみなされました。だから、主が私たちの味方です。誰も敵対することはできません。罪に定めようとしても、キリストが義と認め、また神の右の座で執り成しておられます。自分が人に何と思われているかなど、関係がありません。神が恵みをもって、見てくださっているのです。全知全能の神が自分を、完全に、一方的に、好意を寄せてくださっているのです。

ですから先ほど読みました、詩篇 118 篇の交読文は力を持っています。一人一人が、「主の恵みはとこしえまで。」と歌います。そして、苦しみの中から主を呼び求めたら、主が答えて、自分を広い所に置いてくださったと歌っています。そしてこう歌いました。「6-9 節 主は私の味方。私は恐れない。人は、私に何ができよう。主は、私を助けてくださる私の味方。私は、私を憎む者をもものもしない。主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。主に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい。」

## 1B 敵からの救い

主を信頼することで、敵から救われた人々で思い出すのは、ダニエルとその友人三人です。友人三人は、バビロンの王ネブカデネザルの造った金の像の前でひれ伏すことを拒みました。ネブカデネザル王は、火の燃える炉の中に彼らを投げ込む脅しをしました。けれども、彼らは、「私たち

の仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができになります。(ダニエル 3:17)」と答えました。そして事実、炉の中に投げ入れられても、害を全く受けることはありませんでした。それでネブカデネザルが、彼らの神をほめたたえます。「3:28 ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。」神に信頼したので、他の神々に仕えませんでした。そして主が彼らを救われました。

同じように、ダニエル本人は、獅子の穴に投げ込まれました。三十日間、ダリヨス王以外に祈願する者は、だれでも獅子の穴の中に投げ込まれるという法令が出たその直後に、彼は日頃の祈りを、エルサレムの方向に捧げていました。そして獅子の穴に投げ込まれますが、彼は救われます。6章23節にこう書いてあります。「そこで王は非常に喜び、ダニエルをその穴から出せと命じた。ダニエルは穴から出されたが、彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。」確かに、神に信頼している者は守られます。

## 2B 正しいことを行なう力

ここの「守られる」という言葉は、「高い所に置かれる」という意味があります。誰も届くことのできない、安全な高い所に置かれているということです。主に信頼する時に、私たちはいと高き方からの助けを受けます。それゆえ今、自分が直面している問題よりも高いところにいることができます。

私たちは主に信頼し、主を待ち望む中で力を受けます。主の恵みと憐れみ、自分たちの義ではなく、神ご自身が義であられるゆえに、ご自分の民を守ってくださいます。イザヤ書において、主が彼らにこう言われました。「30:15 立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」立ち返って静かにします。そして、落ち着いて信頼します。そうすれば力を得ます。そして、主は恵みを与えよう、憐れみを注ごうと待っておられます。「30:18 それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。」

## 2B 守られる保証

主は必ず、守ってくださいます。最後まで守ってくださいます。ユダが手紙の中で聖徒たちに、励ましの祝祷をしました。これを、私からの祝祷にもしたいです。「24-25 あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。」信じて、この永遠の命をしっかりと保ちましょう。恐れ退いて滅びるのではなく、主に自分を明け渡し、主を待ち望みましょう。